コンテクスチュアリズムの日本的受容

ーイェール派、ロウ派、タイポ・モルフォロジストの3潮流と近代建築の〈超克〉をめぐる1960-70年代日本建築界の様相ー

建築史・建築論研究室　石沢　英希

序章

0-1　研究背景

本研究は、1960～1970年代以降のコンテクスチュアリズムの日本的受容を検討するとともに、そこに見出されるバイアスを通して、近代建築という大きな物語を失った当時の日本建築の状況と構造に迫ろうとする試みである。

1960年代前後、世界の建築思潮ではモダニズムへの懐疑や批判が生まれ、モダニズムの弱体化がそれに対応しうる建築理論の模索を要請するようになった。その主な流れがやがてコンテクスチュアリズムと総称される思潮群をかたちづくる。

コンテクスチュアリズムとは、ロウがコーネル大学大学院に所属していた1963-1991年における彼の同僚あるいは学生たち、いわゆるコーネル派[注1)]によって命名されたものである。またその理論を展開させ、コーネル派は1960年代イタリアで発展した都市調査、都市計画の理論であるティポロジア・エディリツィア（[伊][注2)] tipologia edilitia　以下ティポロジア）を、コンテクスチュアリズムのひとつであると『*A.D*』誌上で包括的に紹介した。コンテクスチュアリズムは1970年代半ばには、近代建築に代わり注目されるもっとも有力な潮流とみなされるようになった[注3)]。コンテクスチュアリズムは、複雑なコンテクストを建築に積極的に引き受けることで、多元的な知覚や意味作用を建築経験にもたらそうとする運動であった。注意すべきことは、それがたんなるモダニズムの否定ではなく、モダニズムの一元的統合への指向性を批判し、モダニズムの成果をより複合的な建築をつくる方向へと展開させる試みであったということである。

近代建築の動揺と新潮流の形成への渇望は、日本もまた例外ではなかった。しかし日本では、欧米でのモダニズム批判のもつ意義が共有されたとは言い難いように思われる。事実、日本のモダニズム批判のほとんどは、なぜか単純な機能主義の否定、という言説の型を共有してしまっていた。建築家は、一様に機能主義を否定し、それに代わる新しい立脚点を各々が独自に探求したために、建築論はきわめて拡散的な状況を呈し、共通の基盤を持たない状態に陥ったのである。

このことを明治からの長期的な見通しのもとに位置づけてみよう。日本は20世紀初頭よりモダニズムなどの海外の建築思潮と、「国家のために」という根拠を重ね合わせることで建築を設計し、建築論を展開させてきた。またここで用いている「国家のために」とは、国から命ぜられたものを作るという意味だけでなく、建築家が国家を背負っているという自意識のもと、日本らしさや日本的なるものを追い求めるという意味も含まれる。近代の建築家の意識の中心には国家のために建築をつくるという使命感があった。そのあらわれとして東京帝室博物館に対する論争や日本工作連盟批判、近代建築論争、民衆・伝統論争などがあげられる。しかし1970年前後には、その国家を中心とした展開モデルが機能しなくなった。その背景には、1970年に行われた大阪万博を境として建築家が「国家のために」という根拠から建築がつくれなくなったことがあげられる。八束はじめは「日本の「近代」は、それが「日本」（中略）という参照源をもち得たという意味で、戦後も継承されたと考えないわけにはいかない。私はその終局点を1970年の大阪の万国博覧会に位置づけている[注4)]」としている。さらに八束は大阪万博以降、博覧会は国家に代わって広告代理店によって牛耳られたとしていると指摘している。また日埜直彦は1970年に建築家の態度の変化があるとして、1970年以前を国家に向けて建築を作っていた「国家的段階」、それ以後の建築家が個々に問題を設定して設計活動を行っていた「ポスト国家的段階」としている[注5)]。日埜も八束と同様に、1970年の大阪万博以後、同様の祝祭を実現しようとしても国家にその力がなかったと指摘している。つまり1970年に建築家たちは、国家にむけて建築をつくるという使命感からの解放され、建築をつくるための根拠を失った。結果として1970年代は、建築家それぞれが建築をつくるための根拠を構成しようとする、きわめて分散的な時代に入っていく。先に述べた、単純な機能主義の否定が姿を現すようになるのはこの頃のことだ。この単純な機能主義の否定は、1970年以前の機能主義批判を引き継いだものと見る事もできる。

以上のように1970年を境にして、建築の思潮が変わり始めたことがこれまで指摘されている。

ここまで見たように、本研究の中心となるコンテクスチュアリズムの日本的受容を検討する作業は、1960～70年代の日本建築界の状況と構造を問い直すことであり、さらには近代建築の批判も含めた近代建築史の再検討にもつながる作業にもなりうると考える。

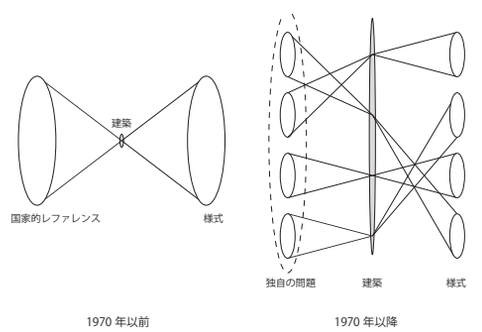

図.1　日本建築界における1970年前後の思考モデル（筆者作成）

コンテクスチュアリズムを主題とした研究は数が少ないが、秋元馨による「現代建築のコンテクスチュアリズムの研究」が既往研究としてまず挙げられる。秋元の研究は、芸術や文学など、コンテクスチュアリズムが成立する背景から、アメリカやヨーロッパでの趨勢まで精緻に調査し成果を残している。加えて日本へのコンテクスチュアリズムの受容と広がりについても言及しているが、コンテクスチュアリズムの論者がどのように受容されているかは着手されていない。

0-2　研究の目的

本研究の目的は1960～70年代の日本建築界の状況と構造の再読であり、そのうえで以下の四点を明らかにすることを目的とする。

① 1930 ～ 1950 年代を中心に日本における近代近代建築批判がどのようなものだったのか、②偏向したヴェンチューリ理解はどのようにしておきたのか、③日本におけるフォルマリズムはどのように展開されたか、④日本の歴史的都市調査はどのような性格をもっていたのか。

0-3　研究の手法

本研究では、各論者の主題からコンテクスチュアリズムが 3 つの系統に分けられるという仮説を立てた。先述の「イェール派」「ロウ派」「タイポ・モルフォロジスト」である。この系統を日本で受容した人物としてそれぞれ元倉眞琴（イェール派）、藤井博巳（ロウ派）、陣内秀信（タイポ・モルフォロジスト）を中心に検討する。

本研究の対象とする言説は、1960 ～ 80 年代の、雑誌と書籍に所収のテキストである。また元倉眞琴の『アーバン・ファサード』[注6]や磯崎新の『建築の解体』[注7]のように雑誌の連載がまとめられ書籍になったものもある。それらは書籍になる際に再度編集や著者の手が加わるため、本研究では雑誌掲載時のものを扱う。

1 章では、コンテクスチュアリズムの成立とその背景を概観していく。さらに日本の近代建築の受容とその批判を 1930 ～ 1950 年代を中心に整理し、日本における近代建築受容の偏向を確認する。

2 章では、ヴェンチューリの『*Complexity and Contradiction in Architecture*』[注8]を主要な研究資料とし近代建築批判の要点を整理する。日本でヴェンチューリは、記号論や象徴性を扱っている点が強調されることが多い。しかしヴェンチューリの初期の著書は、コンテクストによる曖昧性や多義性を主題としている。このヴェンチューリの印象が偏向した経緯を、原著の翻訳や、磯崎、元倉の受容から整理する。

3 章では、ロウの初期の論文「理想的数学のヴィラ」と「透明性―虚と実の透明性」から近代建築批判と再評価を整理する。そのうえでロウの理論を発展させたアイゼンマンによる近代建築の再評価を整理する。また同じくロウから影響を受け、フォルマリズムから建築へアプローチした建築家として藤井博巳の論文から近代建築批判を整理し比較検討する。

4 章では都市を形態的に分析するティポロジアの都市調査や保存計画の手法を整理し、ティポロジアの目的と成果を概観する。またティポロジアを日本に移入した陣内による広島県竹原での調査と、東京での調査を記述する。陣内の東京におけるティポロジアの援用は、イタリアに比べ建物の代謝が激しい日本の環境に合わせて建物の形態から敷地の形態へと視点を移す。また日本でのティポロジアの移入よりも、前に流行していたデザイン・サーヴェイと比較し日本の都市調査の性格を記述する。

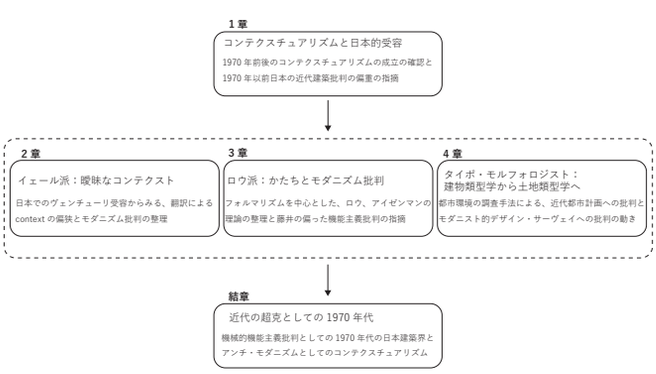

図 . 2　本論文の構造

0-4　近代建築とモダニズムの用法について

本節では、本研究で重要な概念となる、「近代建築」、「モダニズム」を以下のように定義する。

一般に「近代建築」とは、産業革命や市民社会の成立、近代特有の材料、構造、機能を考慮しながら、芸術のモダン・ムーブメントを通して抽出されたメディウムへの意識や構成方法などの探求とが統合されることによって、第一次世界大世後の 1920 ～ 30 年代に確立し、19 世紀の歴史主義に取って代わった建築などと説明される。

また「モダニズム」とは、批評家であるクレメント・グリーンバーグによると自己批判による革新の過程あるいはその態度のことである。ここで用いられる批判とは、破壊や否定等の意味ではない。[注9]また既成の価値や秩序に基づく世界に抗して、近代科学や合理主義に基づく新たな世界を支持しようとする姿勢やイデオロギーを指す。したがってモダニズムという言葉を使って、いわゆる近代建築を生み出していった態度を指すことができ、さらにその近代建築と呼ばれる達成をさらに自己批判して革新をもたらしていこうとする態度をも指すことができる。

しかしながら「近代建築」や建築の「モダニズム」などの語彙が意味するところは論者や文脈によって相当の幅をもって揺らぐものだということは周知のとおりである。本研究のように概念や思潮の歴史を再構成しようとする場合、論者によってこれら主要な言葉がどのような意味で使われているかはその都度丁寧に判断していく。

第 1 章　コンテクスチュアリズムと日本の受容の下地

1-1　コンテクスチュアリズムの成立の背景

本節ではコンテクスチュアリズムの成立と、それらの理論が見いだされる背景に、建築だけでなくさまざまな学問における発展があったことを記述する。

言語学では、フレーゲによる文脈原理が提唱され、語の意味は、語単体ではなく文脈によって解釈されるという概念が認識されるようになった。

芸術ではキュビスムの登場により、ルネサンス以来の伝統的な「視覚のリアリズム」が揺るがされることになった。キュビスムの対象を多方面の視点により解体し画面上に再構成する手法は観ることの基礎を覆した。キュビスムは、複数視点の導入という技法から、物の存在が多層な相関関係のなかにあることを示した。

心理学ではゲシュタルト心理学が発展する。エドガー・ルビンによるルビンの壺は、ゲシュタルト理論をもとに作成されており、図 - 地（figure and ground）反転の説明を簡潔に示した。この錯覚現象の多義性あるいは曖昧性への着眼は、芸術方面にも影響を与えた。

文学では、文学のみならず他の分野にまで大きな影響を与えた運動として、ロシア・フォルマリズムが挙げられる。ロマーン・ヤコブソンは、言語のなかに意味伝達の機能を担う日常言語と、日常的な意味を離れた詩的言語があるとした。のちにヤコブソンの理論は、ムカジョフスキーやシクロフスキーなどによって展開され、言語の芸術的な機能（詩的言語）は日常の自動化した知覚構造を刺激するとした。またこの日常性を打ち破る機能を異化（[露] ostranenie/defamiliarizatio）と名づけた。

思想では、第二次世界大戦後にカール・ポパーの批判的合理主義

や、ニュークリティシズムのひとりとされる、T・S・エリオットの伝統観などが強い影響力をもった。

以上のように、コンテクスチュアリズムの成立の背景には、日常の世界を批判的に捉え、知覚を活性化させる理論の発展があった。

1-2　コンテクスチュアリズムの成立とその展開

本節では、コーネル派によるコンテクスチュアリズムの体系化と、それがモダニズムに代わる有力な思潮となる過程を整理する。またここで概観するコンテクスチュアリズムは、本研究で扱うものとは異なるものであるが、世界的な潮流となることを示す。

コンテクスチュアリズムは、ロウの学生であったスティーブン・ハートとスチュアート・コーエンによって1965年頃に考案された。[注10] 彼らを含むコーネル派はロウの指導のもと、建築形態と都市形態の関係について研究を行った。その背景には、先述のゲシュタルト心理学の図と地の理論があった。1971年、トム・シューマッハーはロウが主宰していたアーバン・デザインスタジオの成果をまとめた、「コンテクスチュアリズム―都市の理想形とその変形について」[注11] を発表する。シューマッハーは、モダニズムによる都市計画によって伝統的な都市が破壊されていることを批判した。また近代建築は、建築自身の要請に従って形態が「理想形」として決定されており、都市から孤立していると指摘した。シューマッハーは、都市のコンテクストに適応させた「理想形」からの「変形」が必要であると主張し、その「変形」が、モダニズムによる都市計画や建築と伝統的な都市を共存させるための手法になると主張した。つづいて、1974年にスチュアート・コーエンは「物理的コンテクスト / 文化的コンテクスト」[注12] を発表する。コーエンは、コンテクストが物理的、文化的の2つの水準に分けられるとした。前者は物のコンテクスチュアリズムであり、後者はイメージのコンテクスチュアリズムである。コーエンは、意味性を捨象した純粋な形態のみを扱う知覚の水準を対象としていた理論に、建築エレメントやテクスチャのもつイメージの水準、つまり認知の水準を付加させた。またコーエンのこの論文の背景には、当時論じられていたモダニストと次世代の建築家との単純な二項対立[注13] を解消させる狙いがあった。

1976年にグラハム・シェインは、「コンテクスチュアリズム」[注14] を発表する。シェインは、コンテクスチュアリズムの概念とヨーロッパの建築思潮の関係を指摘した。コンテクスチュアリズムとは、モダニズムの陰に隠れていた、元々ヨーロッパの伝統的な建築設計のアプローチであったと述べ、当時「ラショナリズム」と呼ばれていたイタリアをはじめヨーロッパの作品群を、コンテクスチュアリズムの作品として紹介した。

こうして1970年代半ば、コンテクスチュアリズムは、モダニズムに代わる世界でもっとも影響力のある思潮となっていた。またコーネル派の一連の活動は、ロウの『コラージュ・シティ』[注15] として結実する。

1-3　日本的モダニズムと日本的レファレンスの消失

コンテクスチュアリズムは近代建築の批判しながらも再評価を試みるものであることはすでに説明した。したがって、本研究の主旨である日本のコンテクスチュアリズムの受容を検討する前に、日本における近代建築の認識について理解するため、本節では主に1930年代から1950年代にかけての議論を整理する。

日本における近代建築受容の特異性は、いくつかの点で指摘できる。まず建築の近代化を推進した主体にある。欧米において建築の近代化を押し進めたのは在野の建築家だった。これに対して、日本において建築の近代化を進めたのは国家自身であり、国家に命ぜられて国家的建築家だった。[注16] つまり日本で建築の近代化は、国家のためにつくることに強く結びついていた。この国家のためにつくるという根拠は、近代以降1970年まで強く残り続けることになる。

またもう一つの特異性として近代建築と機能主義が強く結び付けられる傾向に挙げられる。その傾向は1930年代より確認できる。西山卯三は、1937年『国際建築』に「日本工作聯盟批判」[注17] を発表し、日本工作聯盟の体質を批判しながら、近代の建築家が、無批判に機能主義を受容していることを批判している。丹下健三は、1939年『現代建築』に論文「ミケランジェロ頌」[注18] を発表する。丹下は、後年に当時の近代建築が機能主義、合理主義に傾倒していることを批判したと述べている。[注19]

1950年代に入ると、戦前、戦中期の反省から戦後直後は口にできていなかった伝統について議論が活発になる。その代表的なものとして、「近代建築論争」や「民衆・伝統論争」が挙げられる。この一連の論争の契機となった、浜口隆一による『ヒューマニズムの建築』には、近代建築の理想像がいくつか挙げられており、そのなかに、機能主義によって設計すること、が挙げられている。

このように、近代建築と機能主義が結び付けられながら議論が展開されていた。またそのほとんどが、国家に向けていかに建築をつくるかが問題となっていた。

しかし序章で示した通り、60年代後半に入ると、国家に向けて建築をつくり発展させるモデルは機能しなくなっていく。

日本は、20世紀以降急速に近代化を推し進めてきた。そのなかで建築も、欧米に追いつくべく近代化をすすめ、ひとつの結節点を迎えたように考えていたにもかかわらず、近代建築批判になると機能主義批判をすればよいという空気が広く共有された。

1-4　3つの系統

本節では、コンテクスチュアリズムは論者の主張から以下の3つの系統に大別する。

ひとつは、ヴェンチューリを中心としたイェール派である。コンテクストに多様な意味を包含させ、建築の設計の条件にとりまくもの全てをコンテクストとして扱った。またそのコンテクストによって、建築が変形した結果、空間に多義性が認められるものとして評価した。

次にコーリン・ロウや、ロウから多大な影響を受けたピーター・アイゼンマンをはじめとするとするロウ派である。ロウ派は、美術界ではすでにひとつの理論として確立していたフォルマリズムを建築に適応したことに新規性があった。ロウは、建築を機能や合理性で評価するのではなく、立面や平面などの形式のみを対象として分析した。またアイゼンマンはこの形式の分析、二重性をより抽象的な概念として発展させた。[注20]

最後にイタリアで興った、サヴィエリ・ムラトーリやその助手や学生を中心とした、イタリア・タイポモルフォロジストである。戦中期のファシズム政権や戦後の資本経済による、歴史的都市環境の破壊を批判するものとして現れた。都市組織と建物類型を同時に扱うことで、都市の形成過程を把握し保存を含めた計画を行う手法である。

以上がコンテクスチュアリズムの3つの系統である。共通している点は、都市、建築をコンテクストのなかで多元的、多層的にとらえる点である。

第2章　イェール派：曖昧なコンテクスト

本章では、ヴェンチューリの著書『*Complexity and Contradiction in Architecture*』のモダニズムの純粋主義批判を整理し、日本ではヴェンチューリの理論がいかに受容されたかを、原著と翻訳版の比較や磯崎新と元倉眞琴の連載から明らかにする。

2-1 『*Complexity and Contradiction in Architecture*』の狙い

本節では、ヴェンチューリの『*Complexity and Contradiction in Architecture*』による近代建築批判の内容を明らかにする。

ロバート・ヴェンチューリは、現代の建築論にもっとも早くコンテクストの概念を導入したひとりとされている。ヴェンチューリは1950年に「*Context in Architecture*」と題して修士論文をプリンストン大学に提出している[注21]。ヴェンチューリは、ゲシュタルト心理学が当時発見したとされる「図と地」を基本としながら、建築がそれ自体で独立して存在しているのではなく、都市空間に関係づけられた全体構成の部分として知覚されるものであることを指摘した。ヴェンチューリは、自身の広範な知識とともに論理を展開させ『*Complexity and Contradiction in Architecture*』を刊行する。本書でのヴェンチューリの主張は、おおむね以下の3点に大別できる。

①建築設計にはつねに対立と矛盾がついている事象

②その矛盾を引き受けながら建築が変形していき複雑な形態ができることが正統である価値評価

③建築空間におけるあいまいさや両義性を積極的に評価する価値評価

つまりヴェンチューリは、近代建築の建築を技術や美術など一元的に統合を目指す態度を批判した。

本書を読み解く上で、重要な概念はcontextとambiguityである。背景には、ニュークリティシズムと呼ばれる、1930年代に興った文芸批評からの影響があり、とくにT･Sエリオットの伝統観とウィリアム･エンプソンが定義した曖昧性からの影響を指摘できる。ヴェンチューリがcontextを重要視していたことは、使用回数からみることができる。『*Complexity and Contradiction in Architecture*』では48回使用される。次に出版されるパートナーである、デニス・スコットブラウンらとの共著『*Leaning from LasVegas*』では18回となる。またヴェンチューリは、contextを限定的に扱っている建築家を批判している[注22]。このことから、初期著作ではコンテクストが重要な概念であると考えられる。ヴェンチューリは、構造や環境、構成、壁面などcontextに非常に多様な意味を包含させた言葉として用いていた。すべてが建築にとりまくcontextであると主張した。つまりヴェンチューリは、モダニズムは建築にとって複数あるcontextの一部を捨象していることを指摘した[注23]。さらにヴェンチューリは、多様なcontextを引き受けた結果空間にいくつものcontextが重なり、意味の多重性が認められるとした。また空間にあらわれる多重性を、ambiguityと現している。ambiguityは辞書[注24]では曖昧性と訳される。しかしヴェンチューリが用いる曖昧性は､｢なんとなく」や「ぼんやり」を意味しているのではなく、対象に2つ以上の意味が認められる場合を指している。ヴェンチューリはambiguityを含む建築を評価しており、その多くがマニエリスムやバロックの建築であったが、アルヴァ・アアルトやル・ル・コルビュジエも含まれていた。つまりこれらambiguityを含む近代建築を評価した。

ヴェンチューリは、近代建築の純粋主義を批判したが、曖昧性という新しい評価軸を用いることで、これまでとは異なるかたちで近代建築の評価を試みたといえる。

2-2　翻訳による内容の変化

本節では、ヴェンチューリの『*Complexity and Contradiction in Architecture*』が日本においてどのように受容されたか、特に翻訳による影響を考察する。

ヴェンチューリの『*Complexity and Contradiction in Architecture*』は日本で二度翻訳されている。一度目は松下一之による翻訳『建築の複合と対立』(1969、以下『複合と対立』)[注25]であり、翻訳に問題があるとされすぐに絶版となる。二度目は伊藤公文による翻訳『建築の多様性と対立性』(1982、以下『多様性と対立性』)[注26]である。日本では『複合と対立』が絶版となり『多様性と対立性』が刊行される前の、1972年に『*Leaning from LasVegas*』[注27]が刊行される。『*Leaning from LasVegas*』は石井和鉱と伊藤公文によって翻訳され『ラスベガス』[注28](1979）として出版されこの書の方がむしろ大きな影響力をもつことになった経緯がある。ここに日本におけるヴェンチューリ理解である「象徴性」や「記号論」を扱った建築家として、強い印象をつくった要因のひとつがあると考えられる。

また翻訳の内容についてもいくつか問題点が挙げられる。それが重要な概念であったcontextとambiguityである。

磯崎は、『複合と対立』の翻訳について、ambiguity（曖昧性）が適切に訳されていないことを指摘している。磯崎によると、ambiguityが「不確定性」と訳されたことで、ヴェンチューリの主張が読みづらくなっていると述べている。この点については『多様性と対立性』では改善され「曖昧さ」と訳された。

一方でcontextについては、両翻訳に問題があることが指摘できる。ヴェンチューリの主張を変質させずに翻訳するのならば、contextはそのままコンテクストと訳されるべきである。磯崎はこの点について「contextはコンテクストと訳すべき」と述べる。ふたつの翻訳のなかでコンテクストが用いられる回数をみてもわかるとおり、原著では、48回contextが用いられているのに対して、『複合と対立』では20回、『多様性と対立性』では5回となる。原著では「immediate context」が『複合と対立』では「その周囲のためには」と訳され、『多様性と対立性』では「部分的に考えた場合」となっている。本来であれば「すぐとなりのコンテクスト」と訳されるべきである。これらのようにcontextは、そのものが指す言葉に置き換えられている。翻訳版は、ヴェンチューリの複雑な本書を読みやすくする読者への配慮ともみることができる。しかし翻訳版を読む限りヴェンチューリの極めて重要な主張である多様な「コンテクスト」による矛盾という点を読むことは非常に難しくなる。

以上から、ヴェンチューリの主張は翻訳による変化により、理解が困難になっていた。一部は改善されたが、『ラスベガス』の象徴性や記号論の影響が強く、日本におけるヴェンチューリ理解に大きな影響を与えているといえる。

2-3　磯崎による『建築の解体』

本節では、磯崎新が『美術手帖』で連載していた「建築の解体1968年の建築情況」から、磯崎のヴェンチューリ理解を整理する。

磯崎は1969年より『美術手帖』誌上で「建築の解体」の連載を始める。磯崎はこの連載のなかで、近代建築を前提とした既成の建築概念が解体されていることを指摘し、海外の建築家の活動が多様化していることを紹介した。この連載は、海外若手建築家の紹介と「《建築の解体》症候群」と題された、近代建築以後の建築を考える上で重要なキーワードを5つ選定し、これまで紹介した建築家を再配置するパートとなる。磯崎によって紹介された建築家のひとりに、ヴェンチューリがいる。そのなかで磯崎は、ヴェンチューリがエンプソンの『曖昧の七つの型』の文章構造を引用していると指摘している。磯崎は、当時まだモダニストの影響力が強く、ヴェンチューリに対しても半ば懐疑的な評価がなされていたなかで[注29]、正確にヴェンチューリの意図を掴んでいたことがわかる。

図.3　磯崎によるヴェンチューリとエンプソンの比較
（『建築の解体』より筆者作成）

ただし、磯崎は連載の中で、曖昧性やコンテクストの重要性よりも、シンボルや意味交換作用の側面を強調した[注30]。また、「建築の解体」は当時の学生や若手建築家に大きな影響を与え、その影響がヴェンチューリの偏った理解を促した可能性が考えられる。

2-4　元倉眞琴による「アーバン・ファサード」

本節では、当時学生であり、コンペイトウ[注31]として活動していた元倉眞琴が『都市住宅』で連載していた「アーバン・ファサード」から近代建築の機能批判を整理し、ヴェンチューリの理論の受容を明らかにする。

また元倉は『アーバン・ファサード』のなかで、ヴェンチューリからの影響が強いと述べ、とくに『多様性と対立性』と『*Leaning from LasVegas*』から影響を受けていると述べ、ヴェンチューリが『*Leaning from LasVegas*』で用いた連続写真の手法などを引用しながら、都市リサーチ活動を展開していた。

元倉は、人と物の関係が希薄さを当時の建築や都市の課題であるとした。原因としては、資本主義とモダニズムの行き過ぎた機能主義によるものとしている。現代の都市は、過剰な合理化によって、住んでいる場所への把握が全くなされずに、地名もインフラ料金を払うためのシステムに過ぎないとしている。またこの土地や物への無関心さを「東京疫病」とした[注32]。

元倉は、この病気を治療するために、現在の都市環境の把握が重要であるとして、すでに街にある看板や植栽など、住民による都市を装飾する姿勢を積極的に評価した。つまり街は、小さなスケールであれば徐々に改善することができ、それがすでに行われていることを示した[注33]。この元倉の評価は、ウィリアム・モリスを参照したものであり、住民による装飾への理論は、アレグザンダーの「厚い壁」や「パタン・ランゲージ」を参照していると考えられる。一方でヴェンチューリにも影響を受けたとしているが、

以上のように、元倉のヴェンチューリの受容は、あくまで『ラスベガス』に見られた手法や、商業的な看板などへの評価のみに限定されている傾向が指摘できる。

第3章　ロウ派：かたちとモダニズム批判

本章では、ロウのフォルマリズム批評によるモダニズムへの批判と、モダニズムの再徹底を整理する。またその理論から影響の受けたアイゼンマンと藤井の理論を比較する。

3-1　コーリン・ロウによるモダニズムへの批判と再徹底

本節では、ロウによる「理想的ヴィラの数学」（1947）と「透明性―現象としての透明性と文字通りの透明性」（1955）の要点を整理する。ロウは絵画分析の方法である、フォルマリズム批評を用いることで、ル・コルビュジエの作品の再評価がいかなるものかを明らかにする。

ロウは「理想的ヴィラの数学」のなかで、ル・コルビュジエのシュタイン邸（1927以下ガルシュ）とパラディオのマルコンテンタ（1558-1560）の2作品を比較し、目に見える表層ではなく、深層にある形態構造に共通点を指摘する。ロウは、ル・コルビュジエの設計で行う「歴史への参照」には、元々の意味と現在のコンテクストにおかれたときの新しい意味が二重に知覚できる「引用の二重の価値」があるとして評価した。またロウは、歴史への参照を二重の価値の有無を基準として「引用（quotation）」と「模倣（pastiche）」に区別し、当時の近代建築[注34]がル・コルビュジエの「模倣」に陥っていると批判した。

つづく「透明性―現象としての透明性と文字通りの透明性」では、二次元図形の透明現象や「図と地」現象とともに起きる知覚現象を建築の分析に応用し、曖昧性、二重性の概念を知覚からおきる現象として説明した。そして当時近代建築の特徴として挙げられる透明性の性質は、「文字通りの透明性」（literal transpatency）と「現象としての透明性」(phenomenal transparency)の二つに分けられるとした。そのうえでロウは、ワルター・グロピウスのバウハウス・デッサウ校とル・コルビュジエのガルシュ邸を比較し、前者を曖昧性がなく単純な知覚現象しか起きないとし、後者を複雑な視覚現象があり曖昧性があると後者を高く評価した[注35]。

ロウはこれらふたつの論文から、近代建築の典型とされたル・コルビュジエの作品に認められた曖昧性の背後には、モダニズムが否定した折衷主義の手法がある[注36]という矛盾を明らかにした。またロウは、折衷を様式ではなく、曖昧性をともなう「現象的な透明性」を生み出す方法として再評価したといえる。

3-2　アイゼンマンによるコンセプチュアル・アンビギュイティ

本節では、ロウのフォルマリズム批評を徹底させたアイゼンマンの「コンセプチュアル・アンビギュイティ」の理論を整理し、アイゼンマンによるモダニズムの再評価がいかなるものかを明らかにする。

アイゼンマンは、ニューヨーク・ファイブのひとりであり、その論理的支柱であったロウから強い影響を受けている[注37]。アイゼンマンは、ロウのフォルマリズム批評を、さらに展開させるために、論理学的分析方法を建築の分析にとりいれた。

アイゼンマンは、ノーム・チョムスキーの生成文法論にもとづいて、建築の表現構造を「表層構造」と「深層構造」の二つに分ける。「表層構造」とは色、形態、テクスチャーなど建築のオブジェクトの感覚的な質を指す。「深層構造」とは正面性、背面性、圧縮など建築を構成する要素同士の関係であり、床＝面、柱＝線と抽象的なものへ還元し、それらのもの同士の構成を指す。アイゼンマンは、表層

構造をセマンティック（意味論）、深層構造をシンタクティック（統辞論）と定義し、後者はより意味の転換を複雑にすると評価した。アイゼンマンはこの評価軸をもって、ル・コルビュジエとジュゼッペ・テラーニの手法を比較する。アイゼンマンは、ル・コルビュジエの手法は、船や飛行機、機械など既知のオブジェクトから引用されており、引用による意味の転換[注38]が意図されセマンティックなものであると指摘した。一方でテラーニの手法は、ルネサンスからの引用が見られるが、平面構成や比率など深層構造にかかわるものであり、柱など床が白く塗りこめられているため、要素のみでは意味を発しず、他の要素との関係性によって意味を発生し感じ取れるとし、シンタクティックなものであるとしている。

アイゼンマンは、カサ・デル・ファッショの分析からモダニズムのスタイルのひとつであった「インターナショナル・スタイル」の白い面と白い線による構成を、シンタクティックな操作として再評価し、そのなかに「曖昧性」があることを評価した。

3-3　反近代建築へのかたちの理論

本節では、ロウからの影響を受け、1970 年代初頭からフォルマリズムを主題として活動を始めた藤井博巳が提唱した「負性化」と「宙吊り」という理論を整理し、藤井の近代建築批判の内容を明らかにし、ロウやアイゼンマンと比較しながら、日本のフォルマリズムの様相を明らかにする。

藤井は、近代建築の機能主義によって、人と物の関係が希薄になり、日常の知覚が惰性化していると、当時の建築の問題点を指摘する。また客観的な機能だけが主題となり主観的な側面が抜け落ちることで、建築は施主と設計者の妥協で出来上がっていると批判している。[注39]

藤井は、これらの問題に対処するために、人間の主体性を再獲得するための手法として、「負性化」という概念を提唱した。藤井は「負性化」を以下のように定義する「（前略）飽和した虚構の意味を物質から消すこと、即ち〈負性化〉することであると考える」。[注40] この手法のもと藤井は、物質から意味を消すために、建築の内外をグリッドで囲み、テクスチャは白のみで建築を構成した。その代表例として「鈴木邸」（1971）や「宮島邸」（1973）が挙げられる。

図 . 4　鈴木邸（1971）
（『都市住宅』1971 年 10 月号より）

藤井はすぐに「負性化」によって設計された空間が、表層的な表現にとどまったこと、住まい手が負性化された空間やエレメントに対して解釈をするための手がかりが少なかったと振り返る。[注41]

つづいて藤井は、新たに「宙吊り」の理論を提唱する。[注42] 宙吊りもまた意味の消去が重要な手法となる。しかし全くの意味の消去ではなく、「（前略）存在の関係を切断するように作用する先験的な意味―例えば慣習的な意味、実用的な意味、あるいは伝達用の道具としての意味―を対象にしてのことである」[注43]とあるように藤井は、慣習的な意味や実用的な意味を消去することで、人間の主体性の回復ができるとした。ここで藤井が消去すべきであると述べる実用的な意味とは機能のことであり、理論を展開しながらも背後には機能主義批判があると考えられる。

アイゼンマンは、深層構造から読まれる意味と、表層構造から読まれる意味が重なり合うことで「概念的な曖昧性」が生み出されるとした。しかし藤井は、この意味を読み取る人間の主体性そのものが機能不全に陥っているとした。そのため藤井はアイゼンマンの「コンセプチュアル・アンビギュイティ」の手法は有効性がないと批判する。[注44]

アイゼンマンは、フォルマリズムの手法から、近代建築の再評価とモダニズムの再徹底化を図った。一方で藤井は、近代建築を機能主義として否定しながら、建築をつくる根拠を人間の主体性再獲得へと向けていたと考えられる。

第 4 章　タイポ・モルフィズム：建物類型学から土地類型学へ

本章では、イタリアを起源とするティポロジアが、日本の歴史的都市の調査で援用されたかを整理する。

4-1　ムラトーリ学派の歴史的都市保存と計画

本節では、イタリアのムラトーリ学派、タイポ・モルフォロジストによって考案されたティポロジアの理論を整理する。[注45] またタイポ・モルフォロジストが批判している、近代の都市計画と共時的観点によるモニュメント主義についても確認する。

イタリアでは、1930 年代大戦前のピアチェンティーニをはじめとするファシズム政権や、1950 年代大戦後の資本主義経済によって歴史的都市環境に対する無秩序な開発行為が進められていた。イタリアでは都市が無秩序に開発されているのを反省し、1960 年代から歴史的都市環境の調査を展開した。その調査方法はティポロジア･エディリツィアと呼ばれた。日本では建築類型学とよばれるが、本研究では建物類型学とする。[注46]

ティポロジアは、政治的な色を帯びつつイタリア国内で注目を浴びるものとなった。その手法は、都市を都市組織と建物類型とであわせて調査することで、都市形態の形成過程を明らかにする、というものである。そこで重要な都市の捉え方に共時的観点と通時的観点の二つがある。共時的観点とは、現状の空間的特徴を切って見せ、配列・結合のパターンを明らかにするというスタティックな観点である。この共時的観点のみで、都市を捉えることは、ある地点で時間を止めてしまうことであり、モニュメント主義的であり、タイポ・モルフォロジストはこれを批判する。対して通時的観点とは、都市の形成・変化のメカニズムを時間の積層のなかにあるものと捉え、都市の変化のダイナミズムを解明する観点である。ティポロジアは共時的観点と通時的観点の二つの観点を用いて、都市の多層的に捉えることに特徴がある。[注47]

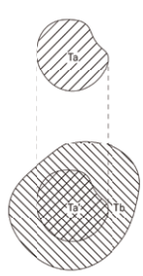

図 . 5　共時的観点
（『都市を読む』より筆者作成）

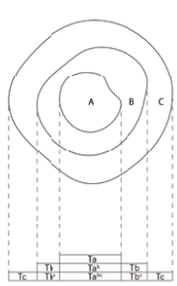

図 . 6　通時的観点
（『都市を読む』より筆者作成）

4-2　竹原、東京での実践

日本におけるティポロジアの理論導入の中心的人物として、陣内秀信の貢献を整理し、広島県竹原と東京での調査を通じて、ティポ

ロジアの受容について明らかにする。

陣内は、東京大学大学院在籍時にイタリア、ヴェネツィア建築大学でティポロジアの理論を学び、イタリア各地を調査した。1975年に帰国後、陣内はすぐに東京大学稲垣栄三研究室として広島県竹原での集落調査にティポロジアの手法を歴史的都市調査に導入した。[注48)]

竹原の調査では、稲垣栄三は単なる「保存」ではなく、保存を含めた計画であるとし、建物の類型、都市形成の過程の整理など成果を見せた。一方で、稲垣は保存を含めた計画よりも、ティポロジアを援用することで、中世の都市形態が把握できることに興味が移っていると述べている。[注49)] つまり稲垣はティポロジアを、保存計画よりも都市形成の変遷を明らかにして中世の都市構造を把握するための手法として期待していたことがわかる。

竹原などの調査を経て陣内は、1977年よりフィールドを東京へと移し、ティポロジアを援用した調査を始める。しかし陣内は自身で述べるように、日本はイタリアと異なり、建て替えが主流でありかつ、火災などで建物がほとんど残らないため、類型を見いだすのは困難であった。[注50)] そこで陣内は、建物の形態から類型を把握するのではなく、土地の形態から類型化を行い、ティポロジアの理論を日本の都市環境に適応させた。また陣内は、土地の類型化によって、東京の地割の形態には、用途や周辺環境から土地の形態について、一定の型が見いだせるとした。[注51)]

以上のようにティポロジアの受容の初期は、中世都市構造を解明するための理論として期待されたが、陣内によって、地割の形態に観点を変え土地類型学と発展した。一方で建物の形態の類型、保存の計画論として発展しなかった点に、日本的受容が見られる。

4-3　デザイン・サーヴェイに見る日本の都市調査の性格

本節では、1970年代半ば日本に、ティポロジアが受容される背景にあった、デザイン・サーヴェイの隆盛と日本的な歴史研究の性格を明らかにする。

日本におけるティポロジアの受容の背景には、日本的な歴史観あるいは歴史研究がある。ティポロジアは、歴史的な都市環境の保存を目標とするだけの理論ではなかった。都市の形成過程を明らかにすることと類型を導き出すことを目標としていた。また形成過程を明らかにすることで、現状の都市に対して、いかなる保存行為が必要であるかという計画学の側面を持っていた。しかし日本では、民家研究を中心として痕跡から復元図をつくるなどの研究が盛んだった。

ティポロジアが日本で導入されたのは、1975年であるがそれ以前に、大規模な集落調査が日本各所で進められていた。デザイン・サーヴェイである。デザイン・サーヴェイは、1965年より始められており、[注52)] 71年時点では80近くのケース・スタディがあるとされている。[注53)] 日本もイタリアと同様に、大規模な集落調査に迫られる背景を持っていた。伊藤ていじは、デザイン・サーヴェイを展開する動機として、現存の物理的環境の事態の把握と、認識の向上を挙げている。伊藤は、開発による歴史的な集落の破壊を危惧していた。しかしあくまで伊藤の目的は、「保存」であった。また伊藤は、自身の活動を「民俗学的アプローチ」や「ドキュメンテーション」としており、モニュメント主義的な姿勢が見える。

一方でデザイン・サーヴェイの権威的な姿勢に反発した、批判的なデザインサーヴェイも行われていた。先述した、元倉眞琴の結成したコンペイトウの都市リサーチである。また元倉だけでなく、武蔵野美術大学の学生によって結成された遺留品研究所など、デザイン・サーヴェイが歴史的な集落を対象にしていたのに対して、東京のとくに看板や植木など、これまでモダニズムがレファレンスの対象としていなかった物を対象に調査を進めた。これらの活動は、調査方法としてはデザイン・サーヴェイと共通する部分があるが、デザイン・サーヴェイの調査に対する態度については批判的であった。[注54)] 元倉は、デザイン・サーヴェイの調査成果を「骨董品」として批判した。[注55)]

日本では、ティポロジアの受容以前からデザイン・サーヴェイの手法が定着しており、さらに保存が主題となっていたため、後者が影響力をもっていた。歴史的な都市を保存を含めた計画する文脈を持ち合わせていたなかったために、保存のみが主題として調査されるか、設計のためのレファレンス探しとして、歴史的な都市環境は見られていた。[注56)]

結章

5-1　近代建築の超克

本研究では、コンテクスチュアリズムを3つの系統に分け、それぞれに日本的な受容のかたちを明らかにした。

①日本の近代建築受容について、1930年代からすでに近代建築批判になると、機能主義批判をすればよいという空気が広く共有され、近代建築の受容の初期から機能主義と結びつけられていることが明らかになった。

②イェール派については、ヴェンチューリは曖昧性という評価軸を提供し、近代建築の再評価を狙っていた。しかし日本では、元倉に見られるように、ヴェンチューリを反モダニストとして捉え『Learning from LasVegas』における手法や象徴性を扱った点だけが先行したヴェンチューリ理解であった。その背景には、磯崎による象徴性を扱った点の強調や、翻訳によって著書の重要な概念であるcontextとambiguityを正確に読むことが困難になっていたことやが明らかにされた。

③ロウ派については、フォルマリズム批評によって、ロウとアイゼンマンは近代建築の再評価し、さらにそこからモダニズムを徹底化することで設計論を展開した。一方で藤井は、モダニズムの機能主義を否定することで、それに対置される意味の生産の場としての建築と理論を構成する、ロウらとは異なる態度をとった。

④タイポ・モルフォロジストについては、イタリアと日本の都市環境の違いを引き受け、建物の形態から地割の形態へ観点を変える方法が見いだされた。一方で建物の類型を導く方法については回答をだせず、日本にすでに定着していた、モニュメント主義による、都市、建物の調査手法があり、ティポロジアは潮流を迎えることができなかった。

1970年前後から「建築の解体」や「主題の不在」がいわれるなか、日本はきわめて多彩な建築作品、建築論、都市論を展開してきた。その展開の内実は、近代建築の機能主義を否定することで、近代建築とは異なる建築の探索であるといえる。これは近代建築を再評価し、自らの歴史の中に配置していこうとした欧米の作業とは全く異なり日本的受容であると考えられる。

注

注 1) 本研究では、ロウおよびロウがコーネル大学に在籍していた 1963-91 年に同僚あるいは学生であった、スチュアート・コーエン、スティーブン・ハート、ウェイン・コッパーなどの建築家、理論家を「コーネル派」と呼ぶ

注 2) 本論文ではイタリア語の場合は［伊］、ロシア語の場合は［露］と記載する。それ以外の場合は英語とする。

注 3) 1974 年、ベルリンの国際デザインセンター（international design center berlin）において行われたシンポジウムには、ヴェンチューリ、デニス・スコット・ブラウン、アルド・ロッシらが参加し、ヨーロッパ建築の思潮の転機となった。また 1977 年ローマで開催された、ローマ・インテロッタ展ではジェームス・スターリング、マイケル・グレイブス、ヴェンチューリらとともに、コーネル大学のロウのチームが参加し、ノリのローマ地図を現代的に再編した計画案を提出した。

注 4) 八束はじめ『思想としての日本近代建築』（岩波書店、2005）

注 5) 日埜直彦『日本現代建築の歴史』（講談社選書メチエ、2021）

注 6) 元倉眞琴『アーバン・ファサード』（住まいの図書館出版局、1991）

注 7) 磯崎新『建築の解体―一九六八年の建築情況』（鹿島出版会、1981）

注 8) *Robert Venturi,Complexity and Contradiction in Architecture*,（moma press、1966）

注 9) クレメント・グリーンバーグ『グリーンバーグ批評選集』（藤枝昇雄、勁草書房、2005）

注 10) 秋元馨『現代建築のコンテクスチュアリズム入門』（彰国社、2002）

注 11) Thomas Schumacher「Contextualism. Urban Ideals and Deformation」（『*Casa bella*』mondadori、1971 年 12 月号所収）

注 12) Stuart Cohen「Physical Context/Cultual Context Including it All」（『*oppositions*』Electa、1974 年 NO.02 所収）

注 13) ミースの「Less is more」に代表される、モダニズムの姿勢をエクスクルーシブ、チャールズ・ムーア―やヴェンチューリのようないわゆるグレイ派の姿勢をインクルーシブとした、二元論による建築批評があった。

注 14) G.Shane「Contextualism」（『*A.D*』Wiley、1976 年 11 月号所収）

注 15) コーリン・ロウ、F・コッター『コラージュ・シティ』（渡辺真理訳、鹿島出版会、1991）／ Colin Rowe、Fred Koetter ,*Collage City*,（Mit Press、1978）

注 16) 注 6

注 17) 西山卯三「日本工作聯盟批判」（『国際建築』美術出版会、1937 年 5 月号所収）

注 18) 丹下健三『丹下健三建築論文集』（豊川斎赫編、岩波文庫、2021）

注 19) 丹下健三「証言：建築 20 世紀　20 世紀から 21 世紀へ　その回想と展望」（『新建築』新建築社、1991 年 1 月臨時増刊号所収）

注 20) Peter Eisenman「From Object to Relationship」（*Perspecta* MITpress、1971 年 Vol13-14 所収）

注 21) 注 4

注 22) ヴェンチューリは『建築の多様性と対立性』のなかで、ミースのバルセロナ・パヴィリオンに対して以下のようにに述べる。

「ミースの整理なパヴィリオンは建築にとっての価値ある含蓄をもっていたが、しかし、内容やことばを極度に限定するその態度は、ある力を生み出すと同時に限界を示してもいる」

注 23) ヴェンチューリは『建築の多様性と対立性』のなかで、近代建築の問題点を以下のように述べる。

「正当な建築家は、建築における多様性を、不十分にしか、もしくは気まぐれに誌か認めてこなかった。彼らは伝統を打ち破り、一から始めようと試み、雑多なもの、いろいろなものが入り混じったものを犠牲にして、諸言的で一元的なものを理想と考えたのだ。」p.23

注 24) 小西友七・南出康世『ジーニアス英和辞典』（大修館書店、2001）本書には意味として第一の意味として「両義（のあること）」としている。

注 25) ロバート・ヴェンチューリ『建築の複合と対立』（松下一之、美術出版会、1969）

注 26) Robert Venturi ほか ,Learning from Las Vegas,（Mit Press、1972）

注 27) ロバート・ヴェンチューリ『建築の多様性と対立性』（伊藤公文訳、鹿島出版会、1982）

注 28) ロバート・ヴェンチューリ『ラスベガス』（石井和拡、伊藤公文訳、鹿島出版会、1979）

磯崎新『建築の解体―一九六八年の建築情況』（鹿島出版会、1981）

注 29) 『都市住宅』1968 年 10 月号の特集「アメリカの草の根」や『新建築』1971 年 10 月号の特集「ぼくらにとってヴェンチューリとはどういう存在か」など 70 年前後にヴェンチューリがとり上げられることが増えた。そのなかの評価は、作品と理論が結びついていないとされる、批判的なものが多かった。

注 30) 磯崎は『建築の解体』の文献目録に、以下のように述べ、ヴェンチューリの主張が「A Significance for A&P Parking Lots, or Learning from Las Vegas A&P」や『*Leaning from LasVegas*』にあるとしている。

「『建築の複合と対立』では、現代建築にたいして歴史的な建築物から学んだことを対峙させたが、ここではヴァナキュラーな街から学んだものをとりあげ、彼の美学がいっそうの徹底をみている。」

注 31) 他のメンバーに、松山巌、井出健がいる。主に東京を対象にリサーチをしたが、『新建築』に海外からの記事を翻訳を行っていた。

注 32) 元倉眞琴『アーバン・ファサード』（住まいの図書館出版局、1991）

注 33) 元倉は都市を変化させる方法として、都市全体を構造から作り直す、タブラ・ラサ的な方法を批判する。「都市環境の変化」のなかで以下のように述べる。

「都市全体を変化させるにはすべての地域を作り直さなければならない。ばかげたことである。」

コーリン・ロウ『マニエリスムと近代建築』（伊東豊雄、松永安光訳、彰国社、1981）

注 34) ロウは「理想的ヴィラの数学」のなかで、コルビュジエを模倣した当時の建築家を「ネオ・コルブスタイル」として痛烈に批判している。

注 35) ロウは「透明性―現象としての透明性と文字通りの透明性」のなかで、バウハウス・デッサウ校に対して以下のように評価している。

「観察者はガラスの壁面を通して中を見るという感動を味わうかもしれない。そして、透かして見ることで建物の内部と外部とを同時に見ることができる。しかし、そうしながらも、彼は虚の透明性から生まれるあの多義的な感動を覚えることはあるまい。」

注 36) ロウは「マニエリスムと近代建築」のなかで、ル・コルビュジエのことを折衷主義者としている。

注 37) ハリー・F・グッドマン＋デイヴィッド・グッドマン『現代建築理論序説』（澤岡清秀監訳、加島出版会、2018）

注 38) アイゼンマンが指摘するセマンティック的な手法は、ロウが「理想的ヴィラの数学」で指摘した「引用」と考えられる。

注 39) 藤井博巳「負化へのエスキス」（『都市住宅』鹿島出版会、1971 年 10 月号所収）

注 40) 藤井が用いる負とは無意味そのものであるとし、以下のように述べる。

「この〈負〉の様式というものについて語り得るだろうか、一切の効用と様式が無意味になったものが、〈負〉なのだ」

注 41) 藤井博巳「負性化へのエスキース No.02」（『別冊都市住宅　住宅第 9 集』鹿島出版会、1975 年 3 月号所収）

注 42) 同上

注 43) 注 43

注 44) 有効性がないと考えられるのは、以下のように藤井は「負性化へのエスキース No.2―宙吊りへ・宙吊りから」のなかで主体性の欠落を指摘している。

「（前略）チョムスキーの構造言語学からアナロジーによって建築の意味構造を執拗に分析しているピーター・アイゼンマンにしても、意味と主体的に関わるはずの自己や〈本質〉を括弧で閉じながらただ記号としての意味を対象として分析している」

注 45) 一般にイタリアで、ティポロジアを用いた都市調査を行ったのはムラトーリ派と呼ばれている。しかし本研究では、日本における展開などを含めたものであり、ムラトーリ派よりも広義となるため、タイポ。モルフォロジストとした。またこの名称は、塚本由晴が『10+1』No. 48 の「東京のタイポ・モルフォロジー」で用いられたものが最初であり、建物類型と都市形態の双方のことを指すときに用いられる。

注 46) edilitia は建物の意であり、建築であれば architettura となるため、本論文では建物類型学と呼称する。

注 47) 陣内秀信『都市を読む＊イタリア』（執筆協力 大板彰、法政大学出版局、1988）

注 48) 稲垣栄三＋野口徹＋布野修司「「近世の意向を通して見る中世の住居に関する研究」をめぐって」（『住宅建築研究所』研究所だより、1985 年 3 月号所収）

注 49) 稲垣は、竹原での調査を経てティポロジアが保存を含めた計画であるとしつつ以下のように述べる。

「近世の遺構を通して中世をみる、あるいは中世そのものを対象にするというように、どちらかというと、次第に古い方に関心が移ってきたことは事実です」

注 50) 陣内秀信『東京の空間人類学』（ちくま学芸文庫、1992）

注 51) 同上

注 52) 伊藤ていじ「デザイン・サーヴェイ方法論考」（『国際建築』美術出版社、1967 年 4 月号所収）

注 53) 宮脇檀「創る基盤としてのデザイン・サーヴェイ」（『都市住宅』鹿島出版会、1971 年 4 月号所収）

注 54) 元倉は自身の活動が特別なものではなく、当時は一般的であったとして振り返り述べる。

「私の作業は、個人として突出していたというのではなく、その時代に誰もが考えていたことを、他の人より少し具体的に実践した、というものだろう。」

注 55) 注 35

注 56) 宮脇檀は、『都市住宅』1971 年 4 月号「創る基盤としてのデザイン・サーヴェイ」のなかで、デザイン・サーヴェイの概念を以下のように語り、デザイン・サーヴェイの共時的観点のかたちをみることができる。

「ある人間が生み出す（生み出した―ではない）自立的な相互関係をできる限り主観的でない方法によって資料化し、系統化されたデーターによって、その内部構造に触れ、それを創造のひとつの母胎の一部とする、ということでしかない。」